

先の見えない時代を 生き抜く上で求められる、 非認知能力の育成について考える

— 研究会レポート —

答えが1つではない問題に向き合い、予測が困難な時代を生き抜く上で必要な力として、国際的にも注目が集まっている「非認知能力」。ベネッセコーポレーションでは、非認知能力とはどのような力で、どうすれば育成することができるのか、そのヒントを探る研究会を、群馬県高崎市で開催した。小・中学校・高校の管理職や担任、教育委員会の指導主事など、群馬県内外から多数の教育関係者が参加。これからの教育を考える上で重要なキーワードとなる非認知能力について語り合い、理解を深め合った研究会の様子をレポートする。

概要

日時 2023年9月16日(土)

午前の部：11時00分～12時40分 午後の部：13時30分～15時00分

場所 高崎ワシントンホテルプラザ 11F「ワシントンホール」群馬県高崎市八島町70

主催 (株)ベネッセコーポレーション エリア事業推進本部関東支社

内容 〈午前の部〉

- ・開催挨拶／(株)ベネッセコーポレーション 関東支社長 田邊心技
- ・「非認知能力」とは何か?～その重要性と今後の課題～
／ベネッセ教育総合研究所 主任研究員 岡部悟志
- ・【講演】『非認知能力(スキル)を伸ばすコツ』／岡山大学教育推進機構准教授 中山芳一

〈午後の部〉

- ・【トークセッション】『大人たちの非認知能力の育て方』教師自身が非認知能力を伸ばすことで、さらに高校が面白くなる／中山芳一・葉一
- ・閉会挨拶／田邊心技

岡山大学教育推進機構准教授 中山芳一 (ながやま よしかず)

1976年岡山県生まれ。岡山大学全学教育・学生支援機構准教授。岡山大学教育学部を卒業後、学童保育の指導員に。学童保育の研究の重要性を確信し、岡山大学大学院教育学研究科へ進み教育方法を専攻。岡山大学では、キャリア教育や課外活動支援を担当。非認知能力を育成するための教育実践の重要性を積極的に発信し、小・中学校・高校・幼稚園、保育園における教育活動の改善、学校・園の組織改善にも取り組む。



YouTuber

葉一 (はいち)

東京学芸大学卒業。営業職、塾講師を経て、2012年にYouTubeチャンネル「とある男が授業をしてみた」を開設。小学校3年生から高校3年生までを対象とした授業動画や、子どもたちの悩み相談に応える動画を投稿。チャンネル登録者数196万人で、総再生回数は6.9億回を超える(2023年10月現在)。経済産業省が葉一氏の動画を活用した家庭学習を推奨したり、群馬県非認知教育専門家委員会のメンバーを務めたりするなど、教育関係者からの信頼も厚い。



「非認知能力」とは何か？ ～その重要性と今後の課題～

非認知能力は よりよい人生を送るための力



株式会社
ベネッセコーポレーション
関東支社長
田邊心技
たなべ・しんぎ



ベネッセ教育総合研究所
主任研究員
岡部悟志
おかべ・さとし



開会にあたって、ベネッセコーポレーション 関東支社長 田邊心技が、「社会的にも注目されている非認知能力について、その理解を深めるとともに、それをどのように育成し、評価すればよいかを、現場の先生方と考える場をつくりたかった」と、研究会を企画・開催した意図を説明。さらに、「コロナ禍で様々な活動が制限されてきたが、今回、久しぶりに多くの先生方が対面で語り合える場をつくることができた。学校種や立場を超えて、それぞれの知見や思いを交換していただきたい」と、主催者としての思いを述べた。

続いて、家庭、学校における子どもの学びを長きにわたり研究しているベネッセ教育総合研究所からの報告が行われた。主任研究員の岡部悟志が、非認知能力とは何か、なぜその育成が重要なのか、そして今後の課題はどのようなものかといった点について取り上げた。

非認知能力は、ノーベル経済学賞の受賞経験があるアメリカの経済学者、ジェームズ・ヘックマン教授が提唱したことで広く知られるようになった。知能検査や学力テストで測定される「認知能力」に対し、自制心や誠実性、好奇心や協調性など、情緒や社会性に関する能力を「非認知能力」という（図1）。就学前の幼児期に非認知能力を育むことで、成人以降の幸福度や身体的健康の増進、反社会的な行動の減少など、大きな恩恵をもたらすことが明らかになっている。OECD（経済協力開発機構）がその重要性を提唱する「社会情動的スキル」とほぼ同義であり、小・中学校・高校で実施されている新しい学習指導要領でも、社会や世界とかわりながら、よりよい人生を送るための資質・能力として「学びに向かう力、人間性等」が位置づけられ、各校でその育成のための教育が展開されている。

図1

2. 「非認知能力」とは何か

ベネッセ教育総合研究所
Benesse Educational Research and Development Institute

- 一般に、知能検査や学力テストで測定される能力を「認知能力」
- 自制心や好奇心、協調性など、情緒や社会性に関する能力を「非認知能力」という

<div style="background-color: #0070c0; color: white; padding: 5px; text-align: center; font-weight: bold;">認知能力 cognitive ability</div> <ul style="list-style-type: none"> ● 測りやすい能力 ● 個人の中に閉じられた 理性的な能力 <p style="font-size: x-small;">具体的には、 IQ（知能指数） 学力、読み書き計算 （暗記量や処理速度） など</p>	<div style="background-color: #9933cc; color: white; padding: 5px; text-align: center; font-weight: bold;">非認知能力 noncognitive ability</div> <ul style="list-style-type: none"> ● 測りにくい能力 ● 個人の内面の心的な情緒や 他者との関係性を含めた能力 <p style="font-size: x-small;">具体的には、 自制心、誠実性、 好奇心、やり抜く力、 協調性、気質、パーソナリティ など</p>
---	---

Copyright © ベネッセ教育総合研究所. All rights reserved.

非認知能力は 認知能力と影響し合う

さらに岡部は、非認知能力は認知能力と別々に発達するものではなく、互いに影響し、補完し合いながら発達するものであることを説明し、国内で「非認知能力（学びに向かう力）」について縦断的に調査した数少ない例として、ベネッセ教育総合研究所が行った「幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査」（2012年～2021年調査）を紹介した。それは、幼児期から中学校1年生までの子どもの学びの様子と、母親のかかわり方などとの関係を継続して調査したもので、幼児期の好奇心、協調性、自己主張、自己抑制、がんばる力といった非認知能力の積み重ねが、小学校からの学習態度に影響を及ぼすことが分かっている（図2）。また、非認知能力の育成においては、子どもの意欲を尊重したり、思考を促したりする保護者のかかわりが重要であると、岡部は説明した（図3）。

小学校高学年、中学生になると、教師を始めとする他者との信頼関係や子ども本人の学習体験が、非認知能力の育成により影響を与えることが明らかになりつつある。そのため、学校現場でどのように非認知能力を育てていくかを、研究と現場での実践が一体となって考え続けていくことが重要であると、今後の課題を語り報告を終えた。

図2

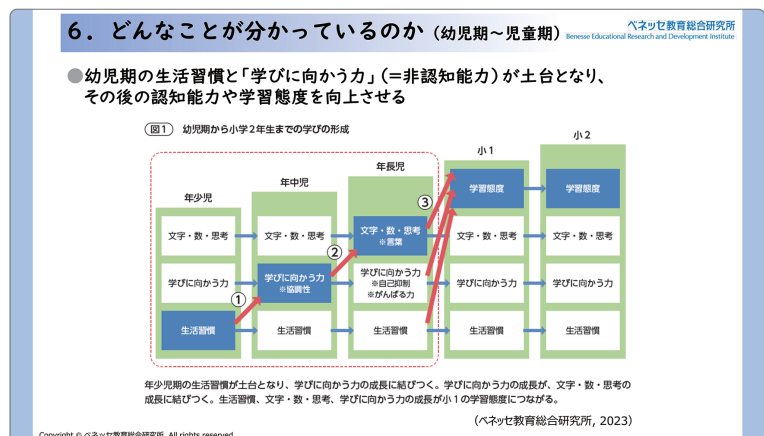
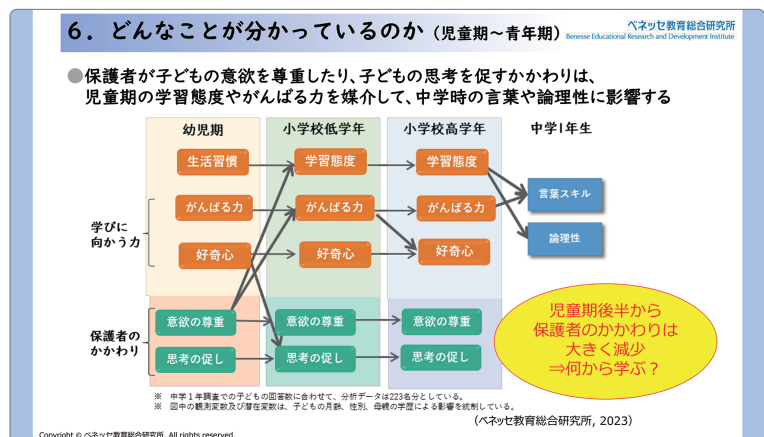


図3



『非認知能力（スキル）を伸ばすコツ』

非認知能力の 育成の鍵は振り返り



非認知能力に関する著書を多く出版し、教育現場や家庭に向けて、非認知能力を育成するための教育の重要性を積極的に発信している岡山大学教育推進機構の中山芳一准教授が登壇。「非認知能力をどのようにして育てていくのか」について講演を行った。

中山准教授は、非認知能力をピラミッドモデル（図4）を用いて説明。よりよく生きていくための力である非認知能力は、最終的には一人ひとりの行動として体现されるものであり、生まれ持った気質や性格が土台となっているが、家庭や学校における保護者や教師などの様々ななかかわりや経験を通して子どもの内面につくられる価値観も、非認知能力を形成する重要な要素であると解説した。

人は、家庭や学校で生まれた価値観を基に、今の自分が取るべき行動や態度を選択し、その選択によって非認知能力は育まれる。例えば、「粘り強く物事に取り組むべき」といった価値観は、実際にそのように行動できたのか、その行動は自分に何ををもたらしたのかを俯瞰的に捉えることで、「粘り強く物事に取り組める」という非認知能力として子どもに定着していく。中山准教授は、「非認知能力を育むためには、振り返りが非常に重要。そして、教師が子どものよいところを見取り、認め、褒めることで、子ども自身の振り返りの質が高まるとともに、非認知能力の育成がさらに促される」と説明した。

図4



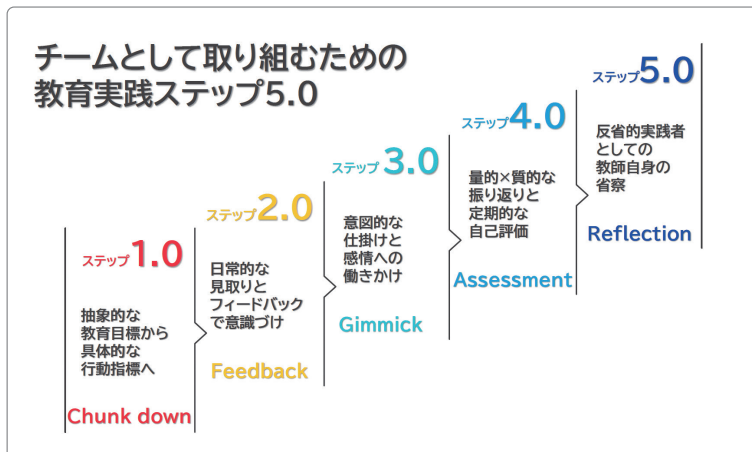
学校全体で組織的に 非認知能力を育むために

これまでも多くの学校で、校訓や校是、教育目標、目指す生徒像として、自制心や誠実性、好奇心、協調性といった非認知能力の育成を目指してきた。さらに、新学習指導要領で示されている育成を目指す資質・能力の3つの柱の1つである「学びに向かう力・人間性等」は、まさに非認知能力そのものであり、これからの学校には、学校全体でその育成を図ることが一層求められてい

ると、中山准教授は時代の変化を説明した。

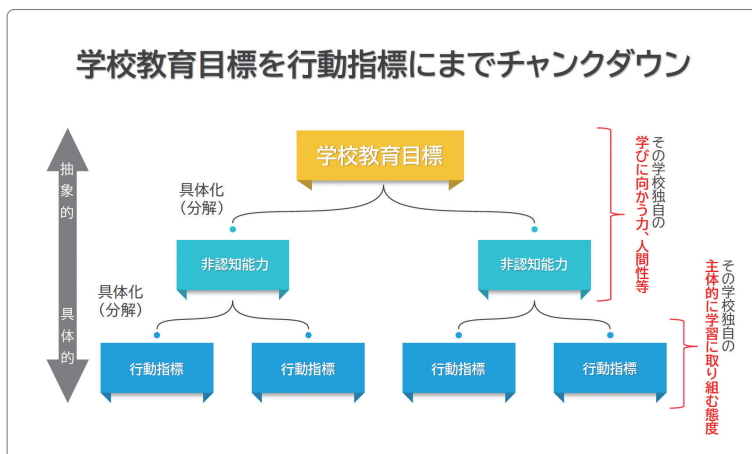
そして、学校全体で非認知能力の育成に取り組むための教育実践ステップ（図5）を提示した後に、中山准教授自身が外部アドバイザーとして教育改革を支援する、広島県・私立広島桜が丘高校の取り組みを紹介した。

図5



学校教育目標を「絵に描いた餅」で終わらせないために、同校では、学校教育目標を非認知能力、さらに具体的な行動指標に分解（図6）、生徒に求める行動として示し、同校の生徒に見合った学校独自の「学びに向かう力・人間性等」を明確にした（図4のステップ1.0に該当）。そうすることで、生徒は行動指標に従って日々の自分を振り返ることが可能になり、また教師も、生徒の行動を共通の指標で見取ることができるようになる（図4のステップ2.0に該当）。

図6



さらに同校では、非認知能力を発揮させる「ギミック（仕かけ）」を取り入れた授業改善に着手。授業単位の指導計画書「ギミックブラッシュアップシート」（図7）を活用して、各授業で引き出したい非認知能力と、それを引き出すための空間・教具・活動面での工夫（ギミック）を明確にした上で授業を行うようにした（図4のステップ3.0に該当）。ギミックブラッシュアップシートには、

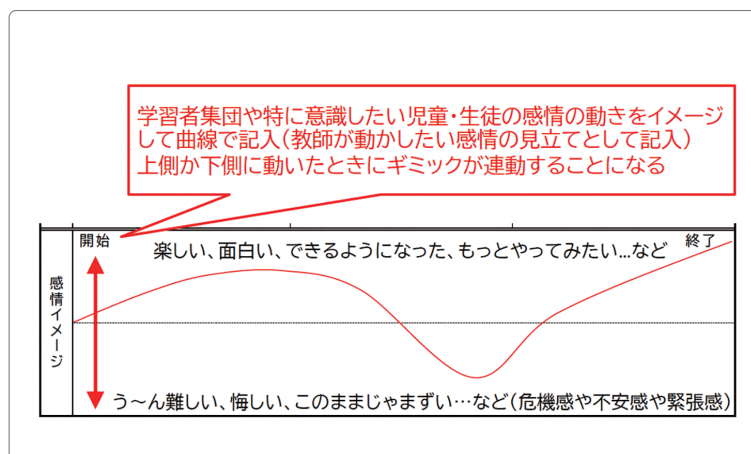
図7

ギミックブラッシュアップシートで明確に！

ギミックブラッシュアップシート		授業名	授業番号
単元名	単元名と本時の内容及び目標		
単元目標			
各ギミックの時間と引き出したい非認知能力	序盤・ギミックの （ 時間 - 内容 ）	中盤・ギミックの （ 時間 - 内容 ）	終盤・ギミックの （ 時間 - 内容 ）
	ギミックについて具体的に説明 空間・教具・活動のどこにギミックを入れるか選択(複数可)		
	<input type="checkbox"/> 空間・ <input type="checkbox"/> 教具・ <input type="checkbox"/> 活動	<input type="checkbox"/> 空間・ <input type="checkbox"/> 教具・ <input type="checkbox"/> 活動	<input type="checkbox"/> 空間・ <input type="checkbox"/> 教具・ <input type="checkbox"/> 活動
児童・生徒がギミックを意識したときに予想できる姿			
開始	終了		
授業時間中の子どもの感情の動きを曲線化			

授業を通して動かしたい生徒の感情イメージを記入する欄もある(図8)が、それについて中山准教授は「感情と非認知能力は深くかかわっており、『できるようになって楽しい』『このままでは分からなくなりそうでまずい』といった感情を生徒に意図的に持たせることで、非認知能力を育みやすくなる」と説明した。

図8



非認知能力の育成において重要な振り返りを充実させるために、同校では、行動指標に基づき授業ごと、単元ごとに生徒が振り返りを行っている。学校現場では、「主体的に学習に取り組む態度」の観点での評価が行われているが、教師による評価だけでなく、生徒による学習過程の振り返りも評価の材料とすることで、より生徒の実態に合った評価となり、さらに振り返りの習慣をつくることで、学校を卒業してからも、自分自身を振り返り、人生を通じて非認知能力を高めていく力を育むことができると、中山准教授は説明した。

* 広島県・私立広島桜が丘高校の取り組みは『VIEW next』高校版 8月号の特集で紹介。
https://view-next.benesse.jp/view_section/bkns/article16562/



中山芳一准教授、葉一氏、 そして参加者が語り合う『大人たちの非認知能力の育て方』

非認知能力は 幼児期にしか育めない？

小学校3年生から高校3年生までが対象の授業動画を投稿したYouTubeチャンネル「とある男が授業をしてみた」で人気を博すYouTuber葉一氏と中山准教授とのトークセッションには、会場に集まった現場の教師たちも参加した。

葉一氏は、授業動画に加えて、子どもたちから寄せられた悩みに答える動画も投稿していると、自身の活動を紹介。それをきっかけに不登校、そして非認知能力について、参加者を交えた対話が展開された。



葉一氏

これまで、小学校3年生から高校生対象の授業動画を約2,500本投稿していますが、それとは別に、子どもたちからの悩みに答える動画も投稿していて、その数は約600本になります。僕自身、子どもたちを応援したい、特に、学校に行けない子を支えたいという思いで動画を作成していますが、最近感じるのは、ちょっとしたことがきっかけで不登校になる子どもが多いことです。きっかけの内容も、友人関係、保護者との関係、先生の一言と様々です。

一見、ささいに思えるようなことで不登校になる子どもが増えたとも思いますし、子ども自身も何が原因で不登校になったのかが分からないケースが少なくありません。そうした子どもたちにどうして接していけばよいか、悩んでいます。



中学校教師



葉一氏

中学生くらいだと、何がきっかけで不登校になったのか、自分でも分かっていないケースはよくありますよね。でも、子どもの話をじっくり聞くと、本人も気づいていないけれど、きっとそれだったんだろうと見えてくることがあります。だから、まずは話を聞いてあげること。そして、一番大事なのは、子ども自身が悩んでいる自分にへこまないこと。「人間なんだから悩むのはあたり前だし、悩んでもいいじゃん」って思ってほしいです。

悩みと向き合う力も非認知能力の1つだと思います。非認知能力は幼児期から育まれると伺いましたが、小・中学校、さらには高校からでも育むことはできるのでしょうか。



高校教師



中山 准教授

非認知能力の土台となる自己受容感、つまり葉一さんのおっしゃる「悩んでもいいじゃん」という感覚は、基本的には乳幼児期の親子関係で育まれます。では、自己受容感が十分ではない子どもには非認知能力は育まれないのかという点と、そうではなく、特に、信頼できる他者との関係の構築が1つの鍵になると考えられています。幼児期以降にも、友人などとのよい関係を通して非認知能力を獲得するチャンスがあるわけです。ただ、SNS 上での衝突など、今の時代ならではの難しさもあるのですが……。



葉一氏

自己受容感が十分ではない子どもは、ちょっとしたことで悩んだり落ち込んだりして、周囲の大人の支援をなかなか受け入れないことが少なくありません。でも、子どもの話を聞いていると、身近な存在である学校の教師が支援してくれることは子どもたちにとって決して無駄ではなく、教師が思っている以上に子どもには響いています。自己受容感を高めたり、非認知能力を育んだりするために、学校の先生方にできることは必ずあると僕は思っています。僕も、子どもと直接話をする時は、「絶対にこの時間を、この子にとって意味があるものにするぞ」といった決意を持って臨んでいます。どの子どもに対してもできることがあるという思いで向き合うことが、我々大人にできることではないかと思えます。僕も頑張ります。

子どもも大人も非認知能力の 高め方は同じ

話題は「大人の非認知能力」へと移った。子どもたちの非認知能力の育成は重要であるが、教師の非認知能力の育成も同様に重要ではないか。大人はどのようにすれば非認知能力を高めることができるのか……。参加者を交えたトークセッションが続いた。

生徒に非認知能力を育む上で、私たち教師にも非認知能力は必要だと思っています。ただ、その必要性を日々実感しているかと言われたらそうではなく、私たち教師が普段からもっと自分の非認知能力を伸ばすことを意識しないとけない気がしています。



高校教師



葉一氏

大人にも非認知能力は必要ですよ。僕の場合、インターネットに動画を投稿していると、いわゆるアンチと呼ばれる人たちから、誹謗中傷がたくさん届きます。非認知能力の中でも、回復力や気にしない力、受け流す力を持っていないとやっていけません。「僕は、お金がなくて塾に通えない子どもたちのために動画を投稿しているんだ。こんな誹謗中傷ではやめないぞ!」と頑張るうちに、非認知能力が高まったと思っています。必要に迫られた中で高まったとも言えます。



中山准教授

非認知能力を育む上で重要なのが、体験したことに自分なりに意味づけをすることです。私たちは自分にとって意味や価値のある経験を積み重ねることで非認知能力を伸ばし、人間的な成長を果たすチャンスを得ます。体験に意味や価値を与えるのが振り返りです。例えば一見ネガティブな体験も、「あの取り組みは失敗したけれど、そのおかげで〇〇さんと出会えたじゃないか」と、ポジティブに捉えられることもあるでしょう。振り返りが大切なのは、子どもも大人も同じです。



葉一氏

日本人は自己肯定感が低いとよく言われます。確かに私たちは、自分のできていないことや不完全な部分に目を向けがちです。でも、完璧な人なんていませんよね。ぜひ先生方には、ご自身や子どもを引き算の視点で見のではなく、「こんないいところもある」「これもできるじゃないか」と、足し算の視点で見たいと思います。そうすることで、非認知能力はますます高まっていくはずですよ。

参加者の

声

- 非認知能力についての見方が整理されました。振り返りの大切さが胸に刺さりました。
- 非認知能力の育成に向けて、学校で組織的に取り組むためのヒントをたくさんいただき、大変参考になりました。
- 非認知能力の育成の肝が振り返りであることに改めて気づかされました。
- 参加者の先生方とグループになって話し合いができたのがよかったです。
- 現代の生徒たちが抱える悩みにどう向き合えばよいかのかが分かった気がします。
- 葉一さんの教育への思いに触れることができました。今回の研究会は、私にとって感動のある学びの場となりました。
- 今回のような、私たち教師が学ぶべき新しいテーマや、話題になっている学校のよい取り組みなどをこれからもたくさん紹介してください。